

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月18日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21720078

研究課題名（和文） 戦前期アテネ・フランセにおける文化的ネットワークとコミュニティの研究

研究課題名（英文） An Investigation into the cultural network and community at Athénée Français between the two World Wars.

研究代表者

宮澤 隆義（MIYAZAWA TAKAYOSHI）

早稲田大学・文学学術院・助教

研究者番号：70454006

研究成果の概要（和文）：戦前のアテネ・フランセにおける講師であった山田吉彦（きだみのる）の活動を中心にすることで、坂口安吾や大杉栄、柳田国男らの間における思想的関連について研究を進めることができた。

研究成果の概要（英文）：I examined the philosophical relationships between Ango Sakaguchi, Osugi Sakae and Yanagita Kunio, through focusing upon the works of Kida Minoru, a lecturer at Athénée Français in pre-war Japan.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：日本文学、語学教育学、社会学

科研費の分科・細目：2901

キーワード：日本文学、語学教育学、社会学

1. 研究開始当初の背景

研究開始当時における文学研究の状況としては、様々な制度と文学運動との関連、文芸市場と作家活動の連携について、メディア環境と芸術との関連についての研究が多く見られた。これらはカルチュラル・スタディーズあるいは文化研究、また往年のメディア論の発展形態として考えられていたものであり、その意味で社会活動と文学との関係を探るものであった。

しかし研究代表者は、この潮流自体がおおむね文学の外部的要因を調査することに終始してしまい、そのテキストと関連しない形をとることは避けるべきであると考えてい

た。つまり、社会的状況をとらえる際に近年文学研究で行われている手法においては、「近代」という時代や文学活動の問題を総合的に考察する際に確定可能な事実性のみ重きをおいてしまい、一面しか衝いていないことが看過されているのではないかという問題意識を持っていた。そこでは文学と時代思想、あるいは解釈や言語の問題がとりこぼされてしまう傾向を持っていると考えられた。

また、そのような状況に関連して、これまでの文学研究においては大学制度における流派や教育の問題については様々な形でクローズアップされ、研究業績自体も積み重なってきてもかかわらず、大学以外の場

における教育機関や諸設備と文学活動との関連性について述べた研究は少なくない。例えば、竹内洋ら社会学者による学制研究は重要なものであり、また文学研究にも益多きものであるが、問題は制度研究とテキストの問題が直結する形で解釈が行われていることであると思われた。

その意味で社会制度研究と文学活動との関連性を詳細に調べることは重要な行為だが、一方でそれ自体が唯一の状況説明として存在してしまうことは問題ではないだろうか。研究代表者はこのような問題意識から、テキスト解釈と制度研究の両者が持つ問題点を改めつつ、新たな研究方法と叙述法に関して模索を行っていた。

今回の科研費研究のテーマは、そのような方法論的問題意識の中から生まれて来たものであった。というのは、テキスト解釈と制度研究の両極の間で見落とされてしまうのは双方の関連性であり、社会状況と言語の問題の関与のあり方そのものではないだろうか。本研究では、大学制度を発端として教育・普及・組織化されてきた文学運動に対し、異なる場において形成されるネットワーク的な関連の中から発生して来た文芸・思想的活動に注目し、それらがどのようなつながりを持っていたかについて考察する必要があると考えた。

そのような点から注目するべきと思われるのがアテネ・フランセをめぐるネットワークとコミュニティであった。研究代表者はそれまで、坂口安吾を通じて浮かび上がってくる昭和前期から戦中戦後にかけての世界史的状況、そしてそこで関連し合っている文学・文化・政治・経済的な事象の問題について研究発表を進めてきていた。そこでは、安吾の作品において一見読解不可能と考えられる部分こそがむしろ、広い文脈やそこに対する彼の思考の展開を通じて見ることで始めて文意として通じることになるという研究方法をとってきた。そこでは例えば冷戦期以前のイデオロギー状況と安吾との関係、唯物論と生物学的言説との関連や、当時の軍事・建築史的言説と安吾の文章の関わり、また戦争や民主主義に対する発言からの問題意識などを読み取ってきた。

これらの方法論は、「ジャンル横断的」と呼ばれるべき手法よりも、むしろテキストが備えていた複層性を、別のコンテクストにつなげることによって輪郭をはっきりさせ、かつ現代的な問題とのリンクを探るという意味で旧来の方法とは方向性が異なっている。「横断」「越境」といったキーワードはこれまでの文学研究で多用されてきたが、重要なのはそこに何をぶつけるべきかというアクチュアルな問題である。

このような意味で、これまで語学教育の専

門学校として位置づけられながら、仏語に関係した戦前の人々の多くが関わり、また多様な人材を輩出してきたアテネ・フランセは極めて特異な場と言え、またその影響が専門ジャンルとしての文学にとどまらず、政治・経済・軍事・社会の幅広い分野の人物達の交流があった場所としてあったことから、そこを通じた人間の具体的な運動を見、かつそこで交わされていた理念や概念、発想を迫ることから近代日本におけるひとつの水脈を描き出すことは有意義な研究であると考えられた。

2. 研究の目的

上記のような事情から、本研究においては、1930年代以降の日本における大学以外の語学教育機関においてどのような交流が生まれ、どのような運動が起こり、またその結果どのような展開をその後に関係者たちがとることになったか、その意義を解明することを目的とした。

具体的には、アテネ・フランセに通っていた作家であった坂口安吾を中心に、アテネ関係の学生や教員、その他関係していた人物の文章から思想的・概念的な関連性を浮かび上がらせることをひとつの目的とし、当時通用していた言説との連関や差異を発見することを目指した。

また、大学教育とは異なる場としてのアテネ・フランセという存在をハブとして、いかなる文化的・人的ネットワークが形成されていたのか、その広がりや具体性を調査することを考え、それがどのような意味を持つのか、社会学的な見地からの考察を加えることも目的としていた。

これらの観点から、当時の社会思想、文学の状況や海外文学・思想の受容関係、また語学教師を媒介とした人間の結びつきやそこで発生していた運動をフォローしつつ、テキストを読解してゆくこととした。その中から、戦争へと突入してゆく時代において、どのような態度がそれぞれの人物が書く文章の中に見られるかを探ってゆくことを考えていた。

最終的には、この研究を通じて、「文化」概念へのアプローチ方法を模索すると共に問い直し、マルクス主義の弾圧から戦争へと傾いてゆく時代のなかで、フランスの社会思想を中心とした、世界への想像力としての社会思想と文学とのあり方を描き出し、これまで日本近代の文学研究においてはあまり考察されてくることのなかったそれらの思想の水脈をたどることで、現在にも示唆的な発想をくみ出し、新たな文学史・思想史の一面を照らすことを試みた。

3. 研究の方法

研究方法としては、まず坂口安吾の近辺の交流を中心に考え、そこからアテネ・フランスにおける人々の位置、そしてその意義を探って行った。

まず、安吾がアテネで同人と発行していた雑誌『言葉』『青い馬』を調査することで、そこで活動していたグループの言動を中心に、言説の場を描き出すことを行っていった。フランス語を学んでいた彼の友人たちの活動からは、安吾の作品内の思想と重なる部分が見受けられ、そこには共通する書籍や文化的状況の存在が推測できる。

また、その同人であると同時にアテネ・フランスの講師でもあった、山田吉彦（ペンネーム＝きだ・みのる）の活動にフォーカスをあて、彼の著作とそこに見られる思想の変遷を追っていった。きだには多くの訳書があり、それらの関連を見てゆくことで、フランス語圏の思想がどのようにアテネを通じて受容されていたかの一端が読み取れると考えられた。

ここでは、きだとアテネ・フランス創立者であるジョセフ・コットとの関係、そしてきだの周囲に集まっていた社会主義者らやアナキストらとの関係、また学問的交流としての柳田国男や他の文学者との交流など、ひとつの結節点として存在していた人物として、彼自身の活動がどのような影響を持っていたのかについても調査を行った。

同時に、坂口安吾の蔵書目録を調べることから、当時のアテネ・フランス書籍部において彼がどのような書籍を購入しているかを知ることができたと同時に、どのような思想の本がそこでは棚に置かれていたかをうかがうことができた。安吾において、それらの資料と同時代的な彼の発言を対照してゆくことによって、これまで見過ごされてきた彼の社会思想の一面が浮かび上がらせられた。

さらに、1920年代～40年代における、当時の社会思想ときだ、安吾らの交錯する部分を探するため、大杉栄によるファーブル『昆虫記』の翻訳本、またコットの旧友であり、アテネに呼ばれて講演を行った文化人類学者のリュシアン・レヴィ＝ブリュールらの著作と彼らの言説を比較検討することで、そこに現れていた発想のあり方について詳しく考察を加えた。

これらの時代的文脈から、最終的には安吾ときだの比較を中心として、そこでアテネ・フランスがどのような意義を持っていたかという点、そして安吾ときだの間で共有していた発想があったとするならば、それがいかなるものであり、またいかなる点において両者が異なっているかに言及していった。その際、同時代の状況を共有し、かつ彼らのネッ

トワークの広がり共有していた人物である、大杉栄と柳田国男を取り上げることにより、そこで交錯する問題点についていっそう了解しやすくなるように論じた。

4. 研究成果

本研究の成果としては、まず学会発表「本能と社会——大杉栄・きだみのる・坂口安吾と『昆虫記』——」、雑誌論文「本能と社会——大杉栄・きだみのる・坂口安吾と「虫」をめぐって——」において、アンリ・ファーブル著『昆虫記』の翻訳書に見られる「本能」という発想が、戦前期から戦後にかけての「社会」という概念を考察する際に参照項となっていたことを論じた。

大杉栄にとって「本能」とは、そこから「知性」を生み出し、共同性を作り上げてゆく理念であった。また、きだにとって「本能」とはひとつの観察すべき対象であり、その発想は「人間」を「動物」や「昆虫」と同等の眼差しで見るという、社会思想と通じていた。それに対し、安吾にとって「本能」とは、個人が否応無く備えている「動物」的部分として認識されているが、それを揚棄することなく抱えたまま「人間」として個を確立すべきことを主張していた。

この三者の「社会」思想は、いわばマルクス主義退潮の後、フランス経由の社会学にもとづく思想を吸収していたが故に、「本能」という概念を重要視しつつ「人間」の習性にもとづく「社会」を形成すべきだという発想に基づいていた。この点、三者ともに生物学的言説の問題と社会の問題をリンクさせつつ、戦前から戦後にかけての社会構想の水脈の一つを示していたことを述べた。

また、雑誌論文「物語の「地盤」——柳田国男・きだみのる・坂口安吾——」では、柳田国男の民俗学に若いうちのきだが触れていたことに言及し、民俗学の構想ときだの活動がどのような形でクロスし、その後の著述へと結びついたかについて述べた。それはきだがフランス洋行中に旅行したモロッコに関する著述と重なることで、植民地支配の言説と同調して行った面があったのである。

きだにとってモロッコとは文化人類学的・社会的な原則と力学が働いている場所として見出されたが、同時にそれを知ることによって一層の植民統治を可能にするという問題を体現していた場所でもあった。戦後になり、村落社会におけるコミュニケーションの原理をルポルタージュ風書き綴った『気違ひ部落周遊記』においてもその問題は見受けられるが、後の『につぼん部落』になると、そこから村落社会における共通原理を東南アジアの諸国に求め、それらの間のネットワークの構築を想像するようになる。この点でき

だの発想は、社会と現在の関係を考える上で示唆的な面があると言える。

一方、安吾はこの問題に関しては「物語」という角度からアプローチし、柳田のアドバイスにより当時刊行されていた『炉辺叢書』の出版と同期しながらも、独自の発想を描いていた。それは、人々の間で伝承される「物語」そのものが、共感の装置というよりも、通訳不可能な他の社会が存在することを示している、と主張するものだった。この点において安吾の活動はきだらの発想とは異なり、いわば社会の集約不可能性を中心に述べていることを論じた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 宮澤隆義、本能と社会—大杉栄・きだみのる・坂口安吾における「虫」をめぐって—、早稲田現代文芸研究、査読有、2巻、2012、100-120
- ② 宮澤隆義、物語の「地盤」—柳田国男・きだみのる・坂口安吾をめぐって—、繡、第24号、2012、116-131

[学会発表] (計1件)

- ① 宮澤隆義、本能と社会—大杉栄・きだみのる・坂口安吾と『昆虫記』—、早稲田文芸・ジャーナリズム学会、2011

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宮澤 隆義 (MIYAZAWA TAKAYOSHI)

早稲田大学・文学学術院・助教

研究者番号：70454006